

「山陰地方における縄文土器研究の現状と課題」を聴いて

聴講日：R 3.11.6
むきばんだやよい塾第22期

はじめに

縄文時代の始まりは約1万5500年前で、終わりは約2500年前と言われますが、近年、弥生時代の始まりが見直されつつあり、福岡では同時代の弥生土器と縄文土器が出土しています。約2500年前は、縄文土器がなくなる時とさえそうです。

縄文人は身近にある自然の産物を主な食糧とした採集・狩猟社会でしたが、けっして食料に困っていたわけではありません。縄文人の工芸は優れ、木を薄く加工して器などにしていて、技術的に劣っているわけでもありません。大陸から稲作が伝わってきて、弥生時代(生産経済)に代わるのが2800年前からで、山陰でも約2500年前には完全に移行しています。

縄文時代は、草創期、早期、前期、中期、後期、晩期の6期に時期区分されています。各時期はさらに細分化され、関東では約100形式、山陰でも50～60形式に区分されています。縄文時代の遺跡・遺構からは炭素年代法が使えるような試料の出土は少ないので、時代区分は土器に依っています。

時期を把握するため土器編年が重要になってきますが、山陰地方ではまだ土器編年の研究が中心で、これからの改良の余地が大きいです。一方で縄文土器は分かり難いと言われ、それは形式が多いからです。編年表を整理するのが将来的に分かり易いと思われませんが、西日本全体でまとめられる段階には至っていません。

1 編年の基礎理論 形式学と層位学

編年とは、遺跡・遺構・遺物について新旧(相対年代)を明らかにすることで、変化の順番しか分かりません。30～40年前から“今から何年前”との表現方法が望まれています。文字のない時代は、放射性炭素年代など自然科学の方法でしか年代を求められません。研究精度の向上が現在進行形で、たびたび結果年代が大きく更新されている段階であり、まだ望まれている表現が使えないのが現状です。

実際の土器の編年研究は「形式学」と「層位学」を駆使して構築します。両者は車の両輪に例えられ、形式学の方が取っ付き易く、使い易いですが、最後の証拠立ては層位学、土層の積み重ねで確定します。

形式学

「形式学」は「物体は時間的・空間的に変化する」とモンテリウスが提唱(1903)したのが始まりです。これはダーウインの進化論を強く意識した解釈で、“社会は進歩する”と考えた社会進化論の一部と言えます。

佐原真氏の解説本にはフィアットの変遷で形式学を分かり易く説明していて、時間が経つにつれてデザインが変わっているのが分かります。土器も基本的には同じで、形や模様が変わっていきます。

ところが形式学には落とし穴があり、“似て非なるもの”を同一系統土器群の時期差と誤認する恐れがあります。「祖型」→「発展」→「衰退」と考えがちですが、逆に稚拙なものから発展していくこともあり、形式学だけで想定した土器の変遷が、出土層の順番で逆転する場合があります。

誤認の例としては九州早・前期の編年の例があります。1956年の時点では、曾畑式が早期の土器と考えられ、前期になると手向山式が出てきて、その後塞ノ神式に変わると考えられていました。これはそれぞれの土器に含まれていたジグザグの文様を系統的な変化と捉えたからです。ところが、1978年にアカホヤ火山灰が発見されたことで見直しに迫られました。

アカホヤ火山灰は、縄文時代早期末に鬼界カルデラの巨大噴火によって噴出し、西日本を中心として広域にわたって降下・堆積した火山灰で、この火山灰層が確認できる地域では、この上位を縄文時代前期、下位を縄文時代早期とする時期区分が一般化したのです。

手向山式・塞ノ神式はアカホヤ火山灰下層で、曾畑式はアカホヤ火山灰の上層で出土することが確認されたことから、現在では(早期)手向山式 → 塞ノ神式 → (前期)轟式 → 曾畑式 に修正されています。曾畑式・手向山式・塞ノ神式のジグザグ様の文様は、それぞれ無関係で“似て非なるもの”だったことがアカホヤ火山灰の層位的研究から明らかにされました。

山陰地方においても前期西川津式細分型式の逆転の例があります。米子出身の井上智博は岡山大学の卒論の中で、「屈曲器形→寸胴器形」、「複雑な文様構成→単純な文様構成」という変遷案を示しました。複雑な文様構成の屈曲器形から、単純な文様構成の寸胴器形へと変遷する案です。

しかし、立命館大学の矢野健一は①西川津式前段階の福呂式、長山馬籠式は寸胴器形で、西川津式の寸胴器形はこれらを継承し、②福呂式・長山馬籠式の文様は口縁部周辺に限定され、横方向に施文される単純な文様構成であり、③西川津式の単純な文様構成は長山馬籠式から継承されたと考えました。現在はこちらの方が合理的と考えられています。

層位学

層位学は地質学理論の応用です。18世紀後半にウィリアム・スミスが「一連の地層においては、上に重なる地層は、下にある地層より新しい」と言う地層累重の法則を提唱しました。

島根県板屋Ⅲ遺跡では、①縄文後期中葉～現代までの上層があり、②その下に約4000年前に堆積した白い三瓶山の火山灰層があり、③縄文前期末～後期中葉の第2黒色土層があり、その中から土器などが出土します。④その下に約5500年前に堆積した火山灰層があり、⑤その下に縄文早期中葉～前期後葉の土器が出土します。⑥それ以下からの出土はなく、層が交互に堆積しているのが分かります。

遺構の重複関係の理解は、地層累重の法則の応用と言えます。重なり合うSK56・SK57・SK58の三つの遺構が出土し、SK57がSK56・SK58の遺構を壊して造られていれば、SK57はSK56・SK58より新しく、SK56・SK58に含まれる遺物は、SK57に含まれる遺物より古いと判断できます。

層位を誤認する例もあります。岡山県笠岡市の津雲貝塚の発掘は1919～20(大正8～9)年に京都帝国大学によって実施されました。縄文時代後・晩期の遺跡で、74体の埋葬人骨が発見され、現在でも縄文時代の墓制論に重要な遺跡とされています。この発掘で山内清男は1937年の「縄文土器型式の大別と細別」の中で「吉備地方」の後期を「津雲上層式」(現在では後期前葉)、晩期を「津雲下層式」(現在では後期後葉)と層序を逆転しています。「津雲上層式」→「津雲下層式」の編年序列は他の複数の研究で正しいことが証明されていて、発掘調査の時点で層位の認識が誤っていたことがわかります。

ここで、層位が誤認された原因は、①傾斜した斜面堆積を水平に発掘したため、最初に出上したのが下層の土器で、後で出土したのが上層の土器だった可能性がある、②人骨が埋葬された墓抗によって層位がかく乱されていた可能性がある、の2点です。斜面堆積を層位に沿って掘削すると、二層目にある埋蔵物が出土した後に、三層目にある埋蔵物が出土しますが、水平に掘削した場合は、三層目にある埋蔵物が先に出土し、その後で二層目の埋蔵物が出土する場合があります、順番が誤認されたと思われます。京都帝国大学の掘削作業者は、土層が傾斜して堆積していることを正しく理解せずに機械的に水平に掘削したので、層位が誤認されました。

「地層累重の法則」が理解されつつも、土器との関係は重視されませんでした。ペトリーによって変わりました。ペトリーとは、エジプト学の権威で、1890年頃、土器の変化が編年に有効であることに気づいて、エジプト先王朝時代の編年を整備し、さらに日用雑器である土器が層位と組み合わせたときに、重要な考古資料となることを指摘しました。そして1914年頃にアメリカや日本に伝えられました。

ペトリーに師事した浜田耕作は、日本にその方法論を伝えました。元々は地質学者の松本彦七郎は、米国に留学して層位学を習得し、1919年頃に留学経験を活かして層位と土器の関係を意識して仙台湾沿岸の貝塚を調査しました。山内清男は、松本彦七郎の助手として貝塚を発掘した縄文研究の権威です。1937年に全国の縄文土器の編年表を発表し、以後、縄文土器編年は山内の編年表の間隙を埋めるように整備されてきました。

小林行雄は、古墳時代研究の権威で、縄文時代に関しては、1935年頃、京都・北白川遺跡で層位的な発掘調査を実践しました。小林は「様式論」を発表し(1933)、のちに弥生土器の編年大綱を示して、現在の弥生土器編年の基礎を作りました。

岩波考古学1巻(層位論)の著者である麻生憂は、日本考古学において、層位の有効性は、大正期後半から徐々に浸透してきたが、戦前には十分に理解されていなかったと述べています。層位の重要性について多くの人が理解したのは、戦後の群馬県岩宿遺跡旧石器の発掘以後と考えられます。

小林行雄と佐々木謙は1937年美保関町サルガ鼻洞窟遺跡で山陰で初めての縄文遺跡の発掘調査をしました。短期間・小面積の発掘ながら良好な層位事例が得られ、現在からみても適切な発掘調査・報告がなされています。

佐々木謙はさらに戦後、京都大学に内地留学し、小林行雄に師事し、その後サルガ鼻洞窟遺跡の発掘調査を10年以上に亘り継続しました。層位的な調査を行い、良好な資料が得られましたが、正式な報告を公表していません。土器型式と層位の関係を検討しようとした形跡はあり、良好な資料を得ながら十分な成果を上げていないのは、土器型式の認識が十分ではなかった可能性があります。

山本清は、1663年に美保関町小浜洞穴遺跡を発掘し、戦後の山陰考古学の基礎を作ります。主に古墳時代を研究し、『西山陰の縄文式文化』1961で初めて山陰の縄文土器を編年的に紹介しました。小浜洞穴遺跡の層位的な発掘調査では、層位と型式との関係は明らかにしていません。小片が多く全体像が明らかにならなかったことと、自身の研究が古墳時代中心であったことから、縄文土器編年を示そうとしなかったようです。

ウィリアム・スミス(1816)は、“一つの地層には、その地層に特有な化石が含まれて、その化石はその上の層にも、その下の層にも含まれていない場合、「その時代に特有な化石を含む層は、遠隔にある地層であっても同時代と認定することができる。」”ことを「地層同定の法則」と定義しました。

A地点の第二層とB地点の第三層から同一の化石が出土したら、A地点とB地点の化石土層は遠隔地であろうと同時期と考えることを「地層同定の法則」と言い、この法則は、遺跡、遺構の同時性を把握するときに日常的に使われます。時期を特定して集めること事態が「地層同定の法則」の考古学的応用で、「地層壘重の法則」より高頻度で使用されます。

2. 山陰地方における縄文土器研究

①モチーフの復元

実際に遺跡から出土する土器は、完全なものは希れで、破片がほとんどなので 破片から“**文様**”の全体像を復元できれば、型式の特徴が把握し易くなります。

②土器の差異を見つける

各遺跡の土器を比較し、縄文帯の幅、J字紋の有無、帯縄紋の数などを見比べて時期差なのか、それとも同時期のバリエーションなのかを見極めます。五明田遺跡と平田遺跡は時期が違う可能性があるかと予測されます。

③出土地点の違いを確認する

五明田式と暮地式では出土地点が異なり、五明田式と暮地式は時期が異なる可能性が高いと思われます。

④型式変化の方向性

(1)九日田式は一筆書きの文様で、縄文帯の幅広い

(2)五明田式は、縄文帯の幅広いが、文様末端が途切れる(一筆書きでない)

(3)暮地式は、文様末端が途切れる、縄文帯の幅狭く、狭い縄文帯が頻繁に用いられる

これらの比較結果とその他の研究から(1)⇒(2)⇒(3)が妥当と考えられます。

⑤一括資料の探索

層位的な発掘調査は少なく、時期によっては目的とした層位事例がほとんどなく、前後の時期と混在することがほとんどです。縄文時代ではありませんが、一括資料の代表例としては荒神谷遺跡の青銅器一括埋納が挙げられます。銅剣埋納と銅鐸・銅矛埋納は双方ともに、誰が見ても同時に一括して埋められたことが分かります。銅鐸と銅矛は別々に埋納された可能性を指摘されていますが、追葬の痕跡もないし、順序も分かりません。

⑥『引き算』と『足し算』

一括資料を探しますが、単純な一括資料は極めて稀れで、遺構から出土したもので他の時期が混じることが多いです。そこで、他の時期の土器を排除(引き算)する必要があります。また、ひとつの遺跡から出土したものは必ずしもすべての種類が存在するとは限らないので、同時期の他の遺跡から不足を補う(足し算)ことも必要になります。

西日本の縄文時代に、土器一括埋納遺構は発見されていません。従って、新しい資料が発見されるたびに、引き算と足し算を繰り返し行って、定期的に編年が更新されなければなりません。その結果、より精度の高い編年が出来上がります。